

三重の古民家で味あう、郷土の魅力

三重県各地を訪ねてみると、築50年以上の古民家を見かけることがあります。伝統的な建築技法で建てられることが多い古民家は、地域の景観に溶け込み、彩りを添えてくれます。また、中には、地域の歴史や文化を語る上で欠かせない存在となっている建物もあります。

今回は、こうした古民家を宿泊体験施設、地域づくり交流拠点、美術館、郷土資料館、古本屋などとして

再生している人々を紹介します。その活用方法は、さまざまですが、郷土を愛し、魅力を発信しようとする想いは同じでした。

※各古民家施設の宿泊各種体験イベントなどに関しては、日時・予約方法・受け入れ人数・料金などがそれぞれに異なり、変更になる場合もありますので、必ず事前にご確認ください。

取材・文……中村真由美・中村元美
撮影……梅川紀彦・尾之内孝昭

ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

点在する観光スポットの拠点として、旅人をいたわるおもてなし

熊野古道おもてなし館

【熊野市木本町】



太い梁と屋根の明かり取りは当時のまま

設として、熊野古道が世界遺産登録10周年となる平成26(2014)年にオープンしました。古道ウォーカーや観光客のみならず、地域の人が通う交流の場となっています。

建物正面は黒漆喰塗りの切妻屋根で、天井の低い2階部分を設けた、つし二階建て。これは江戸時代から明治時代にかけて建てられた様式で、中央の虫籠窓を白漆喰が縁取り、見る者の目を引きます。東側に設けられた低い袖塀も、街道の歴史的な景観と一体となり、往時を偲ばせています。改修にあたり、入口を広くとり、快適な空間をつくりだしました。

熊野古道松本峠から花の窟へと続く旧街道の本町通りに、築130年になる古民家を活用した「熊野古道おもてなし館」があります。風情ある建物は、明治時代中期に建てられた店舗兼主屋で、令和元年、国の登録有形文化財として答申を受けました。元々の所有者であ

る栃尾家は、江戸時代から続く金物などを扱う小間物問屋。戦前まで営業し、その後は住宅として使われていましたが、平成25(2013)年、栃尾家から熊野市に寄贈されました。街道沿いで、商店が並ぶ木本町は市街地の中心部であることから、周遊拠点となる誘客施

吹き抜けとなった土間跡を見上げると太い梁や柱が圧巻。栃尾家が熊野を代表する旧家であったことがうかがえます。奥の座敷二間は、使われていた姿のまま残されています。棚に並んだ提灯を収納する木箱には、栃尾家の屋号「佐々久」のマークが記され、その暮らしが垣間見えます。

熊野古道や周辺施設のパネルレットが充実していて、熊野の土産をセレクトし、観光客のニーズに対応しています。和室でくつろぐ家族連れや、散歩途中に立ち寄る住民も多く、気軽に立ち寄れる休憩所として、絶えず人が行き交います。「熊野市街地には観光スポットが点在していて、それらを周回するための中心的な施設となっています。レンタサイクルもありますので、鬼ヶ城や花の窟まで足を延ばす人も多いですね」と、運営する「熊野市観光公社」代表取締役の小川貴弘さん。また

ミニコンサートやお茶会、絵手紙教室など地元の人々による活動発表の場として、また旧暦のひなまつりを楽しむ「熊野街道ひなめぐり」には栃尾家の雛人形を並べたりと、季節毎の展示も行っています。

館内ではドリンク類を含め、軽食や食事メニューが充実しているのも魅力の一つ。熊野地鶏はコクのある味でうどんやカレーのメニューを用意し、郷土料理のめはり寿司は干物とセットにした定食が人気のようです。

「古道歩きの人がひと休みをしたり、

お問い合わせ

「熊野古道おもてなし館」(月曜日休館)
TEL 0597-7011231



旧街道、本町通りに面した建物



格調高い和室が二間残る



熊野の味、めはり寿司定食



向かって左から岡本 祐子さん、小川 貴弘さん、小林 真由美さん

見るもの全てに趣がある一日一組の貸し切り宿

古道の宿 上野屋

【度会郡大紀町】



明かりが差し込む吹き抜けの部屋



釣り人も多い大内山川のせせらぎ



シックな黒い外壁が目に残る



小倉 均さん(右側)と直子さん

清流大内山川が目の前というロケーション。熊野古道沿いの「古道の宿 上野屋」は、築160年の建物が上品な重厚感を醸し出しています。三和土の玄関から足を踏み入ると、心安らぐ空間が広がり、日頃の慌ただしさを忘れさせてくれます。「気楽にゆっくりと過ごしていただき、くつろぎの時間」と、穏やかな口調で訪れる人を迎えるのは小倉均さん、直子さん夫婦。隅々まで意匠を凝らした和風建築が、訪れる人の心を魅了しています。

「古道の宿 上野屋」は均さんの生家で、中学卒業までを過ごした場所で、設計士でもある均さんが、自らの手でリノベーションしました。家具や装飾品の一つひとつが洗練され、切り取った空間全てが絵になる画廊のよう。それもそのはずで、元々は平成14(2002)年にギャラリーとして改装されました。

江戸末期には、旅籠だった歴史もあります。「ツツラト峠や荷坂峠を越えて紀伊の国へ入る前に、ここに泊まった



リフォームの技とセンスを堪能



客室として利用される畳の部屋



洒落た空間が広がる荒壁の部屋

ス仕立てで提供されます。

宿泊は一日一組限定という条件で、1人から5人まで貸し切りが可能です。訪れる人は北海道から沖縄までと幅広く、口コミで評判が広がっているようです。また宿泊者には裏千家の准教授で茶名を持つ直子さんが抹茶を立てたり、つる細工や川遊び、薪割りといった体験メニューも用意しています。

「宿をめざして、大紀町に来てくれる人がいます。そんな人たちに、どう楽しんでもらうかを考えるのが、わたしたちの使命です」と、最上級のおもてなしで寄り添う直子さん。宿帳には、2人の心遣いに対する丁寧な感想が綴られています。

「宿として使っていただくことが、建物のメンテナンスにもなっています」と均さん。古民家に新たな風が吹き込まれています。

お問い合わせ

「古道の宿 上野屋」

TEL 0598-74-2301

んでしよう。馬喰さんたちにも利用されたようです。しばらく空き家になっていたので設計事務所にしたのですが、余ったスペースをギャラリーに。大紀町でもインバウンドの受け入れに民泊が多くなってきて、平成26(2014)年から宿としての形態にしました」と均さん。時を経て、再び旅人の宿として蘇りました。

当時の状態が存分に活かされ、建材も適材適所で再利用されています。1階中央は床を外した空間にアンティークのテーブル。隣は天井をはずした吹き抜けスペースで、解放的な空間にしました。どつしりとした杉の板の間に、樹齢

百年の太木でつくられた地元家具作家の座卓が置かれています。薪ストーブの部屋には、直子さんの実家から運び込まれた、病院の診察机や薬品棚、ドアが使われ、和洋の絶妙なバランスでレイアウトされています。2階に上がると昔ながらの和室があり、一番奥には隠し部屋がありました。藁や竹があらわになった荒壁の間で、重厚な雰囲気を出しています。知人から譲り受けた仕込みの酒樽の蓋を座卓に、夕食後、ここで杯を重ねる宿泊者も多いようです。

食事は直子さんが、鮎や山菜など土地のものを使って調理し、海も山も川もある大紀町ならではの馳走が、コー

トンガ坂文庫



購入した本を手にくつろげる場所もある

〔尾鷲市九鬼町〕

漁師町の細い路地は、まるで迷路のようです。九鬼漁港から歩くこと3分、集落で唯一の本屋「トンガ坂文庫」にたどり着きます。共同で運営する豊田 宙也さんと本澤 結香さんが集めた約2千冊の本が並んでいます。

本屋に通じる石畳の坂が通称「トンガ坂」。「トンガ」は地元で「大風呂敷を広げる」「大げさな」との意味合いです。築80年の木造平屋建ての空き家を、地元職人や友人の協力を得て改修しました。

豊田さんは平成26(2014)年、地域おこし協力隊として東京から尾鷲市に引っ越し、古本屋開業の構想をずっとあためていました。本澤さんも移住組。「地域イノベーター留学」で九鬼町を訪れたことがきっかけで、暮らしはじめました。

古書のジャンルは小説、アート、宗教や哲学、音楽などさまざま。全て豊田さんと本澤さんのフィルターが通されたものです。2人はほかの地域で行われるマルシェや古本市にも参加していますが、そのときのネットワークで尾鷲出身のアーティストの展示会をしました。「ギャラリー」というほどではないけど、気軽に使える場所として解放していきたい。本屋が九鬼町に来るきっかけになってくれたら」と豊田さん。「ここで宿題をする小学生もいます。児童書を中心に

新刊も扱っていますが、自分のために絵本を買う大人の方が増えていきますよ」と本澤さん。本から膨らむ話題は尽きません。

「町にないものは自分たちでつくって、こんな場所を増やしていけば、面白くなります。山の方にも移動販売に行きたいし、本も作ってみたい。トンガをじっくりと育てていきたいんです」と豊田さんは大風呂敷を広げます。交流の場になりつつある本屋に、期待が高まります。



看板猫の「まだ」を抱く
豊田 宙也さん(左側)と本澤 結香さん
トンガ坂手前で誘導する案内

「間の宿」日永の歴史が詰まった交流拠点 東海道日永郷土資料館(まちかど博物館)



八木家に伝わる袴などが
展示された館内の様子

〔四日市市泊町〕

の一つが「日永の追分」です。国道1号線と県道が交差する一画に鳥居・道標などが整備され、県の史跡に指定されています。そして、町の歴史・民俗・文化を学べる上に、全国各地の旅人をお茶サービスなどでもてなしてくれるのが「東海道日永郷土資料館」です。

「ここは、江戸時代に紀州藩の郷士だった八木家の屋敷でした」。

四日市市の日永町・泊町一帯は、東海道五十三次の四日市宿と石薬師宿(現鈴鹿市)の「間の宿」として賑わったところ。伊勢街道との追分でもあったことから、伊勢神宮参拝者も多く訪れました。町には「日永うちわ」「日永足袋」「追分饅頭」などを売る商店や旅籠が軒を連ねていたといえます。

時は流れ、町並みは変貌しましたが、今も歴史を感じさせる場所



「日永の追分」



向かって左から
島田 均さん、坂倉 健三さん
など、多彩な活動を行ってきました。資料館開館以降は、地域に眠る貴重な

資料を収集し、土蔵付きの木造平屋建ての館内に展示。小学生の校外学習の場として活用されるほか、春に開催される「四日市あすなろ鉄道」主催の「まんじゅう列車」では、呈茶サービス場所となり、毎回多くの来館者で賑わいます。築150年以上の重みが伝わる内部には、日永の古地図、八木家に伝わる袴や紀州藩御用札、「日永うちわ」などの名物・特産品などに加えて、「四日市あすなろ鉄道」関連資料が所収しと並びます。その数、1300点にもおよびます。



「まんじゅう列車」の様子※

「今後は、膨大な資料を取捨選択し、焦点を絞って展示する予定です」と島田さん。皆さんの活動は、今後も進化し続けることでしょう。

お問い合わせ

「東海道日永郷土資料館」
(水・土・日曜日開館)
TEL 059-346-0467

お問い合わせ

トンガ坂文庫
TEL 070-4340-2323

木間々な美術館

【伊勢市横輪町】



美術館内部で談笑する井爪 貞子さん(向かって右)と、牧野 文代さん



向かって左から牧野 文代さん、井爪 貞子さん、牧野 義明さん



「木間々な美術館」外観



満開の「横輪桜」の下で
フォークソング演奏※



井爪 貞子さんの作品



牧野 文代さんの作品



本年開催された野外ジャズライブ
「ホタルの宵 ラテンの夜」※

長でもある井爪さんと、スタッフの牧野義明さん、文代さん夫婦が温かく出迎えてくれました。案内されて入口から奥へと入っていくと、2本の「横輪桜」が目飛び込んできました。続いて、庭の広さに驚きます。現在は手入れが行き届き、ササユリやフジバカマなどの花々が植えられています。当初は草刈りなどで大変だったといいますが、3人の苦労話を伺いながら、「今日も人生の旅の一日 いい日でいたい」の文字が染められた暖簾をくぐります。すると、重厚な廊下や、細工が施された欄間などが目に留まりました。60年前

に宮大工が建てたことから、細部まで丁寧に造られていることが伝わります。また、各部屋にはミシンを再利用したテーブルや、趣ある照明器具などが和モダンな空間を演出し、井爪さんの作品が来館者をもてなすように配置されています。「心は持ち様で晴れたり曇ったり」「ここに共に楽しむ仲間がいる喜び笑いかおがある」などの文字や絵を眺めているだけで、自然と心が和み、元気になっていくのがわかります。

「横輪桜」を眺めるなら2階からが最高ですよ」とすすめられて2階へ。お話し、庭の奥を流れる横輪川のせせら

「すてきな家やなあ、きれいなサクラやなあ。」

12年前の春爛漫のころ、伊勢市横輪町を訪れた井爪 貞子さんの心を捉えたのは、1軒の古民家と庭に咲く見事な「横輪桜」でした。「横輪桜」は江戸時代後期に町内の桂林寺に咲いていたサトザクラの一種といわれますが、ソメイヨシノよりも花が大きく、成長するにつれて花弁の枚数が増えるという珍しい品種。毎年3月下旬から4月中旬ごろには、町内全体に約2000本の花が咲き競い、3万人もの訪問者を魅了しています。

伊勢市内外で絵手紙教室「百花こころ絵」を主宰する井爪さんと、10年近く空家だった古民家との出会いは、まるでおとぎ話のようです。翌日には、持ち主との偶然の出会いもあり、わずか1週間程度で古民家を借りることになったのです。

ある日のこと「木間々な美術館」と名付けられた古民家を訪ねると、同館館長を背にして立つ2本の大木が見渡せました。すぐ横にはソメイヨシノの大木もあり、2種類のサクラを見比べるのも格別だと教わります。また、染色作家でもある牧野 文代さんの作品、繊細で優美な色合いのストールなどが展示・販売されています。

現在、同館が開館するのは毎月第4金・土・日曜日ですが、「横輪桜」開花期間に加えて、6月中旬ごろには恒例の野外ジャズライブが開催されます。ジャズシンガーの伊藤リカさんの美しい歌声を堪能した後は、川辺を飛び交うホタルの光を楽しむことができます。また、秋には「絵手紙展」も開催され、本年は10月23日・26日の予定です。

木々の合間にたたずむ「木間々な美術館」で、気ままに楽しいひとときを過ごしてみたいかがでしょう。

お問い合わせ

「木間々な美術館」
TEL 090-1477-7742 (井爪 貞子さん)

彦左衛門さん〱生家で地域づくり

ふるさと屋

(西村 彦左衛門生家)

【多気郡多気町】



ゆっくりとくつろげる「ふるさと屋」内部

多気町丹生は、弘法大師ゆかりの丹生大師や、水銀採掘の歴史を物語る水銀抗跡などがあり、じつくりと散策が楽しめる町です。町の南側を歩けば、のどかな田園風景の中に水を湛えた用水路を見かけるでしょう。地域の田畑

を潤す一方で、水路に沿ってアジサイの小径が整備されるなど、観光資源としても活用されている立梅用水です。平成26(2014)年に「世界かんがい施設遺産」にも登録された用水の築造に大きく関わっていたのが、西村彦左衛門

(1774〜1830)です。

ある日のこと、和歌山別街道沿いに建つ彦左衛門の生家を訪ねると、白い暖簾が目を引く玄關脇に、大きな杉玉が吊るされていました。「西村家は、江戸時代から大正時代まで造り酒屋『古里屋』を営んでいて、彦左衛門さん〱は4代目の当主でした」と教えてくれるのは、一般社団法人「ふるさと屋」理事長の中西真喜子さんです。同法人は、地域資源を活用した地域づくり事業を実践。その活動の幅は広く、高齢者の暮らしのサポートや防災対策、獣害対策、地域の農産物のブランド化、立梅用水を有効利用するための調査・管理、彦左衛門生家を活用した交流事業などを行っています。

ところで、彦左衛門と立梅用水の関わりとはどんなものなのでしょうか。櫛田川上流に位置する丹生や周辺の村は河床が低いために、川の水を農業用水として引き入れることができず、古くから稲作よりも畑作が中心でした。

そんな状況を見かねた彦左衛門が考えたのは、粥見村立梅(現在の松阪市飯南町)辺りの櫛田川に井堰を設けて水を引き入れ、各村を通して丹生まで送水するというもの。延長約30キロメートルにもおよぶ壮大な計画でした。文化5(1808)年に5か村連盟の建設願書を差し出し、その後も再三にわたる請願活動を実施。その苦勞がようやく実り、紀州藩の直営事業として完成したのは、文政6(1823)年のことだったのです。

中西さんの案内で生家の内部へと入



「ふるさと屋」入口



向かって左から、一般社団法人「ふるさと屋」事務長の稲葉 基文さんと中西 真喜子さん



毎年6月開催の「大師の里 彦左衛門のあじさいまつり」では、ボートに乗って用水路を見学できる。※



「ふるさと屋」内部

ると、間取りや設いなどは、西村家の人々が暮らしていた当時のままで、築400年の風格が漂っています。釘隠しなども凝った作りになっていて、細部にまで心配りされているのがわかります。当家の人々の慎ましく、穏やかな暮らしぶりが目に浮かぶようで、いつしか時を忘れて、くつろいだ気分になっていました。

現在は、平日のみ無料公開ですが、11月10日の日曜日は、年に4回開催される「十日市」開催日のため、公開予定。西村家ゆかりの元坂酒造(大台

町)の協力で販売中の、彦左衛門と妻の須賀の名前を冠した清酒の試飲などが行われる予定です。

「私たちが頑張ることで、彦左衛門さんへの恩返しになればと思っています」と中西さん。今後は、土・日曜日も開館し、より多くの人に立ち寄ってもらえるようにしたいとも話してくれました。皆さんの挑戦に終わりはないのでしよう。

お問い合わせ

「ふるさと屋」(土・日・祝日休館)
TEL 0598-67-5457